

## 箴言9章10節 「知恵の始まり」

### 1A 再出発の願い

1B 新たなに始めたい願い

2B 既にあったもの

### 2A 主の恐れ

1B 「罰を伴う恐れ」からの解放

2B 「神を知る」ことから来る畏敬

3B 父に対する信頼

### 3A 「聖なる方」

1B 罪から離れている方

2B 信頼による清め

## 本文

箴言の学びは、今日は8章から11章までを見ていきたいと思います。午後に一節ずつ読んでいきますが、今朝は9章10節に注目します。「**主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ること**は悟りである。」

著者ソロモンは、知恵を得なさいという呼びかけを1章から9章までで行なっています。10章からは、具体的な格言が始まります。その知恵に対する呼びかけは、1章7節、「**主を恐れることは知識の初めである。**」という言葉から始まりました。そして9章ではその呼びかけをしめくくりに入っ、同じ言葉を使っています。主を恐れること、それが知恵の初め、あるいは知識の初めであるということです。

### 1A 再出発の願い

けれども実は、ここで使われている「初め」というヘブル語の言葉が、違うものが使われています。1章7節における「初め」と、9章10節における「初めחַכְמָה」は違うヘブル語です。1章7節の「初め」は、「優先順位での第一」を意味しています。主を恐れることが、知識において最も大切にされるべきこと、最優先されるべきこと、という意味です。けれども、9章10節における「初めחַכְמָה」は、順番における初め一番ということです。つまり、9章10節では「知恵を始めるにあたって、まず、することは主を恐れること」ということです。順番を表しています。

### 1B 新たなに始めたい願い

私たちは、何かに行き詰った時に「再びやり直したい」と願います。これまでの失敗があります。だから、それを繰り返さないためにも、今、していることはやめて、やり直そうと思います。ところが、時を経ると、いつの間にか自分が以前と同じことを繰り返していることに気づくのです。やり直した

のはよいものの、何か別のことを行なっているようで結局、同じところに行き着くことがあります。

思い出すと、私は高校生の時に勉強に行き詰まりました。それで落ち込むことが多くなったのですが、主の憐れみで、推薦入試で、大学に早めに入学できたのです。それで私は思いました。「これで、やり直そう。大学生になったのだから、一からやり直してやりがいを見つけて、それを一生懸命、行っていくことだ。」と思ったのです。それで見つけたのが、英語で討論するサークルでした。私は一生懸命頑張りました。ところが、すべての練習試合で負けて、二人一組のチームでその相棒は私にひどく腹を立てていました。「また、失敗してしまった。」と思ったのです。

## 2B 既にあったもの

イスラエルの歴史にも、そのようなものがありました。北イスラエルが偶像礼拝に陥りました。初代の王ヤロブアムが立てた金の子牛を拝み続けました。そしてアハブ王がバアル神をイスラエルに導入しました。主が立てられたエフーが、そのバアル崇拝を根絶しました。拝んでいる者を徹底的に殺し、その祭壇は粉々に打ちこわし、公衆便所にしました。バアルの祭司たちを集め、そこで一気に打ち殺しました。ところが、エフーはこれだけ偶像礼拝を憎んだのですが、結局、ヤロブアムの拝んでいた金の子牛は捨てませんでした。せっかくイスラエルの犯していた偶像礼拝は取り除いたのに、その偶像がバアルから金の子牛に変わっただけで、また昔のことを繰り返していたのです。(2列王 10:28-29)

このような空しさを、晩年のソロモンは伝道者の書で、こう述懐しています。「1:9-10 昔あったものは、これからもあり、昔起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。「これを見よ。これは新しい。」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあったものだ。」やり直していても、結局、昔のことを繰り返しているのです。

## 2A 主の恐れ

そこで今朝、注目したいのがこの御言葉です。私たちが、何かをやり直そうとする時に、初めにしなければいけないことは、何か？それは「**主を恐れる**」ことです。主を恐れることから始めれば、主がその道をまっすぐにしてくださいませ。

主を恐れるとは、自分の生活に、主がおられるべき所に居ていただくことに他なりません。まず。これまでうまくいかなかった全てのことが、主の御手の中にあることを信じます。主が、その起こっているすべての背後におられることを受け入れるところから始まります。そして、自分は神の前で明け渡します。そして、このように告白します。「私は、これまで自分で何とかやりくりしようしていました。しかし、うまく行っていません。あなたが今、何かを語り、何かをしようとしておられます。ですから、私はあなたの憐れみを請います。あなたの願われることを行ってください。」と祈ります。自分を捨てて、主の前に明け渡すことです。

そして、自分を喜ばせていたことを悔い改め、神を喜ばせることに転換します。なぜ古いことを繰り返していたのか？それは 神を神としていなかったからです。自分が神よりも好きな、他のものを持っていたからです。つまり偶像を心の中に持っていました。それに引き寄せられていて、いつの間にか自分のものを求めていました。そうではありません、神との交わりの中に戻ります。そして、自分はただ神を喜ばすためだけに生きていることを思い出します。

そして、私たちは主との交わりの中で、神の愛しておられることを愛することに努め、主の憎むものを憎むようにすることです。神の愛しておられること、神が情熱を傾けておられることに、私は興味がなかったかもしれません。しかし、神が愛しておられるのですから、関心を持ち、情熱を傾けます。そして 8 章 13 節で、「主を恐れることは悪を憎むことである。」とあります。主が憎まれていること、主が忌み嫌っていることについて、私たちも決然とそれを拒み続けます。なぜ、「憎む」という強い言葉が使われているのか？それは、悪は独りでおとなしくしていないからです。それを行なうことを要求し、それはやってよいことだ、正しいことだと主張するからです。したがって、悪を退けるためには、それを許してはならないとする意志が必要になります。それが「憎む」ことです。

#### 1B 「罰を伴う恐れ」からの解放

ですから、主を恐れることによって、初めて新しい歩みをすることができます。しかし、主を恐れることについて、誤った考えを持った人たちがいます。それは、神を怖がらなければいけないと思うことです。ここで考えなければいけないのは、「恐れる」の意味です。それは、決して罰を加えるのではないかという怖さのことではありません。「1ヨハネ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」私たちの主、イエス様がその刑罰をご自分の身に受けてくださったので、私たちには刑罰は残っていません。ですから、死の恐怖、死後の裁きの恐怖に怯えることはないのです。「ヘブル 2:14-15 これは、その(主の)死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」ですから、刑罰による死から来る恐れは、むしろ主は私たちから完全に取り除いてくださいました。

ところで私たちは、絶えず恐れとの戦いをしています。将来に対する不安があるでしょう。何かに対する恐怖があるでしょう、「O×恐怖症」という言葉がたくさんありますね。そして、人に拒まれるという恐れは、かなり大きいです。しかし箴言では、「29:25 人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」とあります。そして私たちが人を恐れると、永遠の視点から物事を見ることができなくなります。イエス様は言われました。「ルカ 12:4-5 からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺したあとで、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」主は、雀でさえ忘れておられないのだから、ましてや頭の毛さえも数えておられるのだ、だから人を恐れることはない、と言われます。

## 2B 「神を知る」ことから来る畏敬

私たちが抱くべき「主の恐れ」は、畏れ敬う思いです。そしてその畏れ敬いは、何か危害が加えられるというのではなく、むしろ反対で、自分の罪を完全に赦し、清めてくださった、それだけ主が愛してくださったという、驚くべき愛に触れる時です。刑罰による恐れを完全に排除されたことを知ることによって、むしろその権威に対して、恐ろしいほどになるのです。

長血を患う女を思い出してください。彼女は長年、流していた血がイエス様の着物のすそに触ったことによって止まりました。そして、イエス様が「だれがわたしの着物にさわったのですか。」と尋ねられました。その時に「女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。(マルコ 5:33)」とあります。そして不道德の女もそうでした。「ルカ 7:37-38 すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油のはいった石膏のつぼを持って来て、泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。」これほどの敬いがなぜできたのか？それは、この女はイエス様にその罪を赦していただいたからです。刑罰の恐れがない愛に触れると、人はその愛の主を恐れるようになります。

ところで、私たちの社会は、権威や畏れ敬いを無くしていこうとする中にいます。悪い平等主義がはびこっています。「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。(ローマ 13:1)」とあるのに、服従する、従うという概念がありません。ある方がこのようなことを仰っていましたが、同感しました。小学生ぐらいの時に、「あなたが好きな通りにしていいのよ。自分で選んで決めなさい。」と親に言われたそうです。それで、とてつもない恐怖を覚えたというのです。善悪の境界線も分からないのに、自分のこの好み、自分で決める、このようなことを言われることのほうが、子供は不安になるというのです。このように、権威の下にいない人は不幸です。神の権威も、主の恐れも悟ることはできないからです。しかし、権威に下にいる時、権威に服従している時に私たちは平安で、安心しています。

イエス様は優しい方です、へりくだった方です。私たちを友とさえ呼んでくださる方です。ご自分の権威を主張されません。しかし、それは権威がないことを意味していません。むしろ、そのへりくだりの中に、だれも寄り付くことのできないほどの権威があります。心が高ぶってしまうと、その権威を見ることができません。ペテロは、これから十字架に付けられ、三日目に甦ることを宣言されたイエス様をいさめて、「そんなことはあってはいけません。」と言いました。イエス様は、「下がれ、サタン。」と言われました(マタイ 16:23)。ペテロが、イエス様を自分と同等とみなしたその高ぶりに、サタンが働いたのです。

## 3B 父に対する信頼

そして「主の恐れ」とは、前回学んだように、父のようにしてその訓戒を聞くということです。子は知識がありません。したがって父に拠り頼みます。たとえ自分がそうは思っていないくても、父の指

導に従います。これを、しつけと言います。同じ態度を主に対して持つべきです。「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りに頼るな。(箴言 3:5)」ですから、従順が試されます。

ですから、知識が多くて知恵が欠けていると高ぶりになります。これは面倒です。指導する人がいけないと思っていることを教えようとしても、知識だけは多くて、従順とは何かを知らないから歯向かうだけなのです。悪者や愚か者は、叱責すると牙を剥くことを箴言は教えています。9章7節はこう言っています。「あざける者を戒める者は、自分が恥を受け、悪者を責める者は、自分が傷を受ける。」その反面で、その人に知識は少ないけれども、知恵に富んでいると、その人はどんどん成長できます。叱責を受け入れることができるからです。「箴言 9:8-9 あざける者を責めるな。おそらく、彼はあなたを憎むだろう。知恵のある者を責めよ。そうすれば、彼はあなたを愛するだろう。知恵のある者に与えよ。彼はますます知恵を得よう。正しい者を教えよ。彼は理解を深めよう。」ですから、知識が多くて知恵に欠けているか、それとも知識は欠けているけれども知恵は備えているか、考えてみましょう。

福音書では、知恵のある人は悔い改める取税人や罪人のような者たちでした。彼らは律法の言われていることをイエス様が教えられていることを聞き、そのまま受け入れました。そして、知識は多く知恵のない人々は、パリサイ人や律法学者たちでした。律法についての知識は多くあるのですが、イエス様が彼らの非を責めると、彼らは怒り、ねたみ、激しくイエス様を責め、挑みかかりました。ですから、知恵のある人はますます知恵深くなります。知識に欠けていても、正されて、なおのこと成長します。けれども、知恵のない人は叱責を憎みます。

### **3A 「聖なる方」**

そして10節の後半には、「**聖なる方を知ることは悟りである。**」とあります。

#### **1B 罪から離れている方**

「聖なる」とは、罪から離れているという意味です。限界のある人間とは圧倒的に差異があるということです。隔絶されている、超然としていることです。そのような方を知る人が、悟りを持っている人です。イエス様が、ガリラヤ湖でみことばを教えられたことを思い出してください。ペテロはその時、一晩中、漁をしていましたが釣れませんでした。ペテロにとっては、イエス様は人間としてのユダヤ教のラビです。しかし、イエス様が網を降ろしなさいと言われて、舟が倒れそうになる程の魚が釣れました。網も破れそうぐらいでした。そこでペテロは言いました。「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。」と言った。(ルカ 5:8)」ペテロは、イエス様をどこかで同一に見ていました。尊敬はするが、人間としてのラビの域を超えていませんでした。しかし、その大漁を見て、これこそが神が選んでおられるメシヤであると悟ったのでしょう。それで、「私のような者から離れてください。」と言いました。聖なる方を悟ったのです。

## 2B 信頼による清め

しかしイエス様は、「こわがらなくてもよい、これから後、あなたは人間をとるようになるのです。(10 節)」と言われました。そして、そのままペテロたちは舟を捨ててイエス様に付いていきました。そしてペテロは、主イエス様にそのまま付いていきました。自分は全くの罪人であり、この方から離れなければいけないと悟ったのですが、しかし、この方が呼ばれるその招きに応答して、この方に付いていきます。自分に至らなさ、自分の罪深さを知りつつ、なおのこと聖なる方に付いていくことができます。それは、光のところに來る者は、その光の中で神はその人を清め、守ってくださるからです。「ヨハネ 3:21 しかし、真理を行なう者は、光のほうに來る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。」

私たちが、これまで生きてきたその人生で、いつもどこかで行き詰っていると感じているでしょうか？ 知恵の始まりは、主を恐れることです。そして聖なる方を知ってください。そうすれば、これまで見えなかった新たな道、考えもしなかった道、主の用意されたすばらしい道を見出すことができます。